仙台市民図書館移転開館１０周年

国民読書年記念フォーラム

日時　平成２２年１１月２８日（日）１３：３０より
会場　せんだいメディアテーク６階ギャラリー

基調講演「世界に通ずる道」　～私の読書体験

作家　森　まゆみ氏

対談　「読書は未来をつくる」　～読書文化と読書の大切さ

作家　森　まゆみ氏

仙台市長　奥山　恵美子

司会　川元　茂氏

仙台市民図書館移転開館１０周年

国民読書年記念フォーラム

日時　平成２２年１１月２８日（日）１３：３０より
会場　せんだいメディアテーク６階ギャラリー

ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

基調講演

「世界に通ずる道」 ～私の読書体験

作家　森　まゆみ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

対談

「読書は未来をつくる」～読書文化と読書の大切さ

作家　森　まゆみ氏

仙台市長　奥山　恵美子

司会　川元　茂氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

ご挨拶

司会　それでは仙台市民図書館移転10周年国民読書年記念フォーラムを開催いたします。私は本日の司会進行を務めさせていただきます市民図書館の佐々木と申します。よろしくお願いいたします。開会にあたりまして、仙台市民図書館館長の伊藤益義からごあいさつ申し上げます。

開会あいさつ　皆様、こんにちは。今日はようこそお越しいただきました。市民図書館長の伊藤でございます。本日はお忙しいところ、このように多数お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。ここせんだいメディアテークでございますが、平成13年1月に開館いたしました。平成23年、来年の1月に開館10周年を迎えることになります。現在、記念事業を開催しておりまして、この6階会場でも消費社会と均質化を乗り越えるアートの夢という展覧会が開かれております。ご覧のように様々な品々が天井から吊り下げられております。

市民図書館はメディアテークの2階から4階に入っておりますが、同じく平成13年の1月に西公園からこちらのほうに移転して、開館して、こんにちに至っております。従いまして市民図書館といたしましても、来年の1月に移転開館して、ちょうど10周年を迎えるということになります。

また今年は国民読書年でもございます。このようなことを記念いたしまして、記念フォーラムを開催することといたしました。本日は初めに作家の森まゆみさんから「世界に通ずる道」～私の読書体験と題して、基調講演をしていただきます。そのあと株式会社プレスアート取締役でKappo・書籍編集長の川元茂さんを司会に、森まゆみさんと奥山市長とで、「読書は未来をつくる」～読書文化と読書の大切さというテーマで対談をしていただきます。

森まゆみ先生は東京都のご出身で、早稲田大学政治経済学部を卒業、出版社勤務、大学教員を経られて、現在フリーの作家でいらっしゃいます。東京の地域雑誌『谷中・根津・千駄木』編集人として、またノンフィクション作家・エッセイストとしてご活躍され、著書としましては『鷗外の坂』『「即興詩人」のイタリア』など多数ございます。宮城県の丸森町にもたびたび滞在されておられ、平成20年から21年にかけましては、河北新報に「丸森いったりきたり」という記事が掲載されております。

それから奥山市長はこの初代メディアテークの館長でございまして、移転後の市民図書館の館長も務められました。森さんのご講演や、お2人の対談を通しまして、改めて読書の魅力や読書文化の大切さを考える機会としていただければ幸いと存じます。

市民図書館におきましても、地域、市民に役立ち、ともに成長を続ける図書館を目指しまして、皆様の読書活動や生涯学習のお役に立てますよう、様々なサービス提供に努めてまいる所存でございます。簡単ではございますが、私のあいさつはこの程度にいたしまして、早速森先生にご登壇いただきたいと思います。それでは森さん、よろしくお願いします（拍手）。

基調講演

「世界に通ずる道」～私の読書体験

作家　森　まゆみ氏

森まゆみでございます。よろしくお願いいたします（拍手）。何かとても素敵なというか、不思議な舞台でございまして、さっきから皆さんもしかして、上から自転車が落っこったりしないかなとか、心配になっている方もあるかもしれませんけど、絶対落ちないそうですので、よろしくお願いします。では 40 分か 45 分ほど、私の読書体験の話をさせていただきます。気楽にやらせていただきます。

本当に仙台市民図書館が移転して 10 年、またメディアテークができて 10 年。おめでとうございます。本当にこちら見せていただいて、こんなに近くにこういう立派な図書館、そしていろんな自分たちが知の冒険をしていくのに、役に立つようなこういう施設がある皆さんはお幸せだなというふうに思っております。

また今日は仙台には、私より優れた作家の方が多くいらっしゃる中で、お呼びいただいて光栄でございます。私は実に地味な作家でありまして、小説というのは一度だけ書いたことあるんですが、あんまりうまくないのでやめまして、主に評伝、それから地域誌、女性史、それから書評はかなり長くやっておりまして、朝日・毎日・読売・信濃毎日・北海道新聞とかいろんなところに書評を書いていました。

それから随筆も書きますし、批評はそうですね、映画評や芝居評もやることもございますが、ノンフィクションっていわれると、ちょっとあんまり自分にぴったりしないんですけども、文芸を中心にいろんなものを書いております。それから聞き書きという手法で、いろんな優れた方のお話を聞いて、それを本の形にする。

なかなかご自分では書かれない方が多い。例えば京都大学の名誉教授で、四手井綱英先生っていう方がいらっしゃいます。去年亡くなられましたが、森林生態学という学問をおつくりになった。林学という、森は木の工場である、たくさんの木をどうやったらいち早く育てられるかみたいな形の学問を、もっと環境、生態学として捉えるということをされた先生です。この方は里山という概念を最初に発見された方ですけど、この方の『森の人四手井綱英の九十年』（晶文社）という本も書きました。ほかに新内の岡本文弥師匠のことを「長生きも芸のうち」、出雲の百姓、佐藤忠吉さんのことを「自主独立農民という仕事」などに書いています。そんなわけでいろんな本を書いております。

子供のときから、私は作家になるっていうふうに決めていた方っていうのはいらっしゃるんですが、私の場合はそうではない、はっきりした考えはなかったんですが、今になってみるとやっぱり、この仕事が自分には一番向いているっていうか、好きなことだなあっていうふうに思います。とにかく小さいころから本が好きだったのは確かなんですね。

私は生まれたのは昭和 29 年で、1954 年です。東京の焼け残った古い街の長屋の片っ方で生まれ育ったんですけども、今、いろいろ考えて、なんで私はあそこに生まれたのかっていうことがよくわかりました。今日ここに来る前に、仙台の空襲の記念館を見せていただいたんですが、私の場合は母が 3 月 10 日の下町の大空襲で焼け出されまして、でも命は助かり、父のほうは 5 月 25 日の東京の山手大空襲、これは東京の人は大体知っている、この日に芝白金で焼け出されて生き残った。財産

は失うし、戦前のものは、うちにはもう一切ないんですね。だから古いお家に住んでいる方はうらやましくてしようがない。

おばあちゃんの櫛か何かが１個あったと思う。これしか過去とのよすががない。そこで結婚した２人が所帯を持つとしたら、東京の下町の焼け残った街の長屋が空いていたってわけです。ですから読書にはそんなにいい環境じゃなかったですね。

今の子供たちは逆にあふれるほどの本があって、あふれるほどの絵本がある。私たちのころっていうのは家にも本棚らしい本棚も、そういうわけでなかった。ただ、運がよかったのは、都電の線路を挟んで反対側に創文堂という本屋があったんです。私はこれが、ここのおじさんとは今でも仲良くしていますけど、本当に私にとって宝の箱だったわけですね。すごく小さな本屋さんです。

私の家は歯医者をしていました。父と母も歯医者だったんですけど、手に職があったから、一切焼け出されたけども、どうにかおかげさまで苦労っていうかな、お金のことではそんなに苦労しないで育ってきて、段々むしろよくなる方向に、高度成長に入っていった。

その待合室で取っていた雑誌っていうのが、私にとっては最初の読書体験ですね。それは『スクリーン』っていう映画の雑誌。それから『週刊新潮』それから『ミセス』って女性誌が出たんで、それも取っていましたね。この３つの雑誌は私にとってはとっても大きい存在でした。映画が好きになったのも毎月そのスクリーンをめくって、例えばウェストサイドストーリーを眺めていて、憧れたりしたのが大きかったと思います。

それで週刊新潮は、表紙は谷内六郎さんのすごくかわいらしいんですけど、中はもう本当にすごくえげつない雑誌ですね。それで、でも私は生理とかセックスというものを知ったのは、この週刊新潮ですね。親は何も言わなかったし、そんなものを娘が隠れて読んでいるとは知らなかったと思いますが、随分小さなときから、梶山季之さんの『女の警察』なんていうのを読んじゃって、花柳界とか、それから『芝桜』っていうのは有吉佐和子さんだったと思いますけど。とても素敵な挿絵がついている花柳界小説で、芸者さんが水揚げされる話とか、そういうのが載っているんだけど、そういうのもばりばり読んでしまっていたんですね。だからそういう意味では週刊新潮も大事なっていうか、私にとっては役に立った雑誌だと思います。

それからミセスっていう雑誌は、今は全くつまらない雑誌になってしまった。なぜならば、何も物をつくることと連動していないですね。私が子供のときのミセスっていうのは、服のつくり方とか手芸とか、とにかく後ろのほうはずっと型紙みたいなのがついていて、母はそれで私たちに洋服をつくってくれました。休みの日になると、忙しいのに日曜日もちゃんと布地広げて、頭に鉢巻巻いて、ジャキジャキ布を切っている母の姿を思い浮かべます。

そのころのミセスは、まずものをつくるっていうことを手放していない雑誌だった。いまだにミセスっていうタイトルなのに、子育てのことは全く書いていない。これもちょっと変だ。毛皮を着て、宝石をつけて、香水をつけて劇場に行くみたいな生活ばかり書いてある。まったくリアリティのないセレブな雑誌。

私が子供のときのミセスは大変に香りの高い雑

誌だったと思います。私はラディゲとかそういう、それから誰だろうな、『悪の華』、ボードレールとかああいうものを知ったのはミセスですね。そしてかなり高名な学者や、加藤周一さんなんかも連載を持っていらしたし、それからソニーの社長さんの奥さんが何かマナーのことを書いていらしたり、石井好子さんのパリに関する随筆が書いてあったり、犬養道子さんのヨーロッパに関する連載があったりっていうようなことで、もう私はこれは、小学生のときにもうむさぼるように読んだ。やっぱりそれによって、やはりヨーロッパの文明とか、アメリカの機械化された家とか、そういうものについて知ったと思うんですね。

まだ図書館っていうのはそばにあんまりなかったと思うんです。東京の文京区っていいまして、一番近いのが鴎外記念本郷図書館ですね。ここが昭和 36 ～ 37 年にできていると思いますが、私はそこはあまり使ったことがない。図書館というものができた、一番身近になったのは中学に入ってからですが、中学校のそばに小石川図書館というのがあるのを見つけて、もう本当に喜んで、ここに入り浸りました。

小石川図書館の思い出はたくさんあるんですけども。まずお腹が空くもんで、部活が終わったあとに駆けつけて、地下にコーヒーショップがあったんですね。そこでパンと牛乳を買って、まずそれを流し込まないと本も読めないっていう感じで、そのとき、そこは開架式でしたけれども、棚の中をさまよって本を借りて読むと。

その中で一番面白かったのが『皇女アナスタシヤ』。これはロシア革命でニコライ二世の一家が虐殺されているわけですけれども。この中の王女が生き延びて、アメリカか何かに渡っているっていう話だった。まあ、なんてそんな不思議な話があるのかしらと思って読んだ。

私は去年『女三人のシベリア鉄道』っていう本を書きました。これは明治の終わりに与謝野晶子が夫鉄幹を追って、パリまでシベリア鉄道に、言葉もできないし、お金もないのに、1 人で乗って行ったっていうこと。それからそのあとに昭和に入って、ロシア革命 10 年後のモスクワを見に、中條百合子、のちの宮本百合子が行くという話。それからそのあと林芙美子がまたパリにいる恋人を追いかけていく、シベリア鉄道に乗って行くと。このあと fuga のような、女 3 人の旅を私が追った話なんですけれども。書くときに昔、中学校のときに皇女アナスタシヤの本っていうのを読んだなあっていうのを思い出しましたね。

そんなふうに小さいときに読んだものが、体の中に蓄えられていて、何かの弾みに芽を吹く。これは幸田文さんなんかもモノの芽が吹くっていう言葉を使いますけれど、体の中に、どこかに残っていた遺伝子というか、何かしまってあった種が突然芽を吹くような感じっていうのが、私も何回も経験があります。

ほかに子供のころ読んだもので一番やっぱり思い出深いっていうか、いろんな思い出深い本があるんですけど、『フランダースの犬』っていうのがやっぱり好きでしたね。これについて、私が書いたエッセイが今、教科書に載っちゃったんですけども。

最初に知っていたのは、幼稚園の紙芝居で先生がしてくださったフランダースの犬なんですね。ご存じのように、ネロっていう少年がパトラッシ

ュっていう犬を連れて、アントワープまで毎朝牛乳を売りに行く。貧しい少年なんです。だけど絵がすごく好き。それでアントワープの教会で、ルーベンスの絵がかかっているのを見たくてしようがないんだけど、お金がなくて見られない。それである日、ある晩かな、ある日それを見に行って、それで寒くてそこで眠ってしまう。朝はまた元気に目が覚めて帰ってくるみたいな、そういう紙芝居だったんですが、父があるとき酔っ払って、フランダースの犬っていう本を買ってきたんですね。

私はもう嬉しくて、朝まで待ちきれなくて、夏の朝4時ぐらいに明るくなったら起き出して、その本を読んだんですね。そうしたら最後、結末が違うじゃないですか。結局、2人は凍えて死んでしまうんですよね。その名画をもう、覆いをかけられた名画がうっすらどういうことだか見えて、そしてそれで「神様ありがとうございます。この絵を見ることができました」と言って、ネロとパトラッシュは恍惚のうちに死んじゃうんだと思うんですね。

私はそのときに、もうギャーギャー、急に泣いたんですよ。本当悲しかったし、ネロが死んだってことが悲しかったけど、同時に私が今まで知っていた、先生が読んでくれた物語は嘘だったんだっていうのがショックで、大人は嘘をつくんだなっていうことを知りました。子供向きに翻案するときに、やっぱり残酷であるとか、死ぬっていう結末にしないでハッピーエンドにしてしまうとか、そういうことがとても多いんだと思うんだけど、それはやめてもらいたい。

ただ、子供にとって、本を読める環境っていうのがあるかないかっていうのは、すごく大きいんだと思うんですね。だからそういう意味で、目の前に創文堂があったっていうことや、小石川図書館っていうのが近くにあったってことは、とても大事なことだったと思います。

それから、もっと言うと小学校のときは担任の先生が休むと、なぜか1日図書館にいてもいいということになってしまい、何であんなアバウトなことやっていられたのか、今じゃ考えられませんが、それで端から本が読めたんで、先生休まないかなっていつも思っていましたね。

あのころは、視聴覚の時間ってあったの、皆さんご存じですか。あれは何か戦後の教育の中で、視聴覚教育の重要さが叫ばれたんだと思うんですが、各小学校に16ミリ映写機みたいなものが配置されて、私たちも視聴覚教室のところに、ひと月に一度か、もっと行ったかな、それで何かいっぱいいろんな、今思えば16ミリフィルムを見せられたんです。これが意外に体にたまっていますね。

うちのスタッフがもう映画が大好きな人なので、たまたま谷根千が去年、惜しまれながら27年の終刊になりましてから、文京区から仕事がきまして、文京区が持っている所蔵フィルムを全部調査しろっていう指令が下ったんですね。もう仕事だということで、毎日みたいに見ていて、私にもついでに「見に来ない？」っていうんで見たりするんですが、全部覚えているんですよ。ああ、これ視聴覚の時間に見た！って、あ、これ見た！っていう。

例えば潮の満ち引きなんていう科学映画みたいな、理科の映画ですとか、台風の仕組みとか、電気がつく仕組みというような、そういうのもあるし、東海道の旅とか、修学旅行の前に見せられる、修学旅行に行ったらおとなしくしましょうねみた

いな、マナーを教える映画とか、生理の仕組みとかいろんなのがあるんですが、結構覚えているんです。

今でも『キクとイサム』とか、『善太と三平』とかっていう、今思えば名画もその中で見せられたんですね。だから今は各家にテレビもあるし、家庭任せになって、あんまり学校では視聴覚教育していないんじゃないかと思うんですけども。ああいうのはぜひやったらいい。かなり名画を見ていたような気がします。

小石川図書館でありがたかったことは、毎月日本映画の日本の名画のシリーズというか、講演会があって、それは私は、中学高校とずっと通いました。だから中学高校で、たくさんの名画を見てしまいました。小津安二郎ですとか、溝口健二ですとか、今、東京では京橋に映像のアーカイブがあるんですが、その辺の歴史的映画を見てしまったんですね。しかもそのとき解説がすごく面白かった。

これは岩崎昶さんといって、岩波新書で映画の理論だとか、映画の技術とか書いていらっしゃるほどの著名な映画評論家の方が、毎月来て、もう今でも鶴のような痩身で解説して、『ポチョムキン』、エイゼンシュテインとかの『イワン雷帝』とかみんな見せてくれたんですから、私は本当にこんな幸せなことはないと思うんですけども。

ですからそういう求める少年少女のために、何か見る場所ともの、企画があるっていうことは、何十年経ってもこうやって覚えている私にとっては、もう確信を持っていえることなんですね。

私は学校教育というのも大事だと思いますが、基本的に人間はセルフラーニングっていうか、自分で自分が勉強するしかないと思って、やっぱり自分が求めてした勉強じゃないと身につかないと思うんですね。単位を取るために出ていた大学の授業は、ほとんど全部忘れました。でも自分で図書館で、望んで読んだ本のことは忘れないんですね。

中学ぐらいのときには三越デパートとかで、イギリス王室フェアとかってやるんですね。そうするとそれに行って、イギリスの匂いを嗅ぎに行く。タータンチェックっていうものを覚えるとか、それから王室御用達のロイヤルドルトン、それこそウェッジウッドとかそういう陶器っていうものが、ああ、これなのか！って見るとか、それからクッキーとか、ビスケットなんてものを見て、それから紅茶を買ってくるとか、そういうことの中で、イギリスっていうのはこういう国なのかってまるごと匂いを嗅ぐと、イギリスの本が読みたくなるんですね。

それで例えばどんなものを読んだかな。『ナルニア国物語』とか、『嵐が丘』とか『ジェーン・エア』とか『レベッカ』とかですね。レベッカっていうのは傑作小説だと思うんですけども。ダフネ・デュ・モーリアっていう人が書いたもので、これも閉じ込められている、ちょっと頭のおかしくなった貴婦人なんか出てくるような、ちょっとゴシックな怪奇小説みたいなところもあるんだけど、映画にもなっていますね。

それからその次に今度、伊勢丹か何かで、フランスフェアとかやっているんですよ。そこに行くと、今度はフランスの香水ですとか、「夜間飛行」「ミツコ」「フィジー」「バラベルサイユ」とか名前も空想をかきたてるしシャネルのスーツとか、そ

ういうのを見るって、あ、フランスっていうのはこういう国なのかと思って、そうすると今度フランスのものを読みたくなる。それでラディゲを読んだり、ボードレールを読んだり、カミュを読んだりします。高校ぐらいのときはヌーベルロマンという、新しい小説でロブ・グリエとかマルグリット・デュラスとか、そんなものも読んでしまったんですけども、何かそうやって、私は1年で1つの国ぐらいを潰していましたね。

だから半年フランス漬けになっちゃう。これはすごく早い習得の方法で、お勧めしたいと思うんですが、集中的にガーッと読むと、身につくんですね。だから半年でフランスを何となく理解したような気持ちになって、シャンソンも覚えてフランス語も覚えて、テレビのフランス語講座を聞いていた。

それでその次はフランス革命に興味を持って、フランス革命に関するあらゆる本を読んだ。桑原武夫さんの『フランス革命の共同研究』とかそういうのも呼んで、ルソーを読んだりしていて、そのときにサン・ジュストっていう人が出てきて、これはジャコバン派のロベスピエールの片腕みたいだった人なんだけど、ものすごく美男子で、潔癖な男なんですね。それで大変詩の才能もあるんだけど、最後はジャコバン派はクーデターで倒れちゃって、ロベスピエールと一緒に、26歳ぐらいで断頭台で死んでしまうんですけれども。

私はこの人にすごくいかれちゃって、初恋っていうか、あんなに男の人を好きになったのはきっとあれが初めてかなっていうぐらい、サン・ジュスト、サン・ジュストで大騒ぎしていたんですね。

だからあとになって、『ベルサイユのばら』っていう漫画を池田理代子さんが書いたときに、中にサン・ジュストがよく出てきたときは、本当にちょっとショックだった。自分だけの宝物だと思ったのを人が知っていて、漫画にしているっていうんで、ちょっとがっかりっていうか、反対に私以外にも、サン・ジュストに思い入れを持っている人がいたんだって嬉しくもなったみたいなところがあります。

これは少女が好きになる条件をきちっと備えている人なんですね。沖田総司っていう、全然立場は違うんですけど、今思えば新撰組っていうのは幕末テロ集団ですが、沖田総司にもちょっとクラっとしました。ほかの旧友でも沖田総司が大好きだった人がいますけれどね。まず美男子ですね。そして女につれない。あんまり女に見向きもしない人。そして剣が強いとかね。何か才能がある。そして夭折するという。こういう四拍子揃った人でしたね。

高校ぐらいのときから、フランス革命なんかに興味が出て、ですからフランスのあとはロシアにいったんですね。ロシア文学を、ロシアマイブームがきまして、ツルゲーネフとか、ドストエフスキーとか、トルストイとかって、中でもプーシキンなんかも面白かったですね。『スペードの女王』なんかの最後に、トランプのカードの女王がにやっと片目をつぶって笑うところなんかもう恐くて、恐くて、夜寝られなくなっちゃったりなんかしましたけども。それで少し政治とか何かに興味を持ったんです。

私は中学のときは音楽部だったので、ミュージカルを歌ったり、オペラのアリアを歌ったりしたんですけども。高校は今度は演劇をやりまして、演劇っていうのは音楽にくらべると、かなり政治的なんですね。だからブレヒトとか、ベケットとか、ああいうのを読み合わせなんかしていくと、やはり社会変革が頭にきてしまうので、だからもう大体、中学高校で、文学や芸術は大体わかったから、これは上の学校に行くんだったら、私のわからない社会科学の方に行こうというふうに思った。

だから私は読書っていうのは、1日1冊本を読む人っていうのはものすごい読書家だと思うけども、10歳から70歳まで1日に1冊本を読んだとしても、21,900冊しか読めないんだそうです。もちろん読書っていうのは30分でパーッとわかる本もあれば、ひと月格闘してもわからない本もありますから、一概にはいえないんだけれども。そうすると5万冊の本を持っているなんて自慢したってしようがないことで、それはほとんど読んでいないっていうことかもしれないですね。

だから私はそんな読んだかどうかわからないけれども、大事なことは、自分なりの地図を持つっていうか、世界に通ずるっていうことは、やっぱり私はここのところは読んだけども、ここのところは全然知識がないとか、私にとってはこの分野は暗黒大陸のように何も読んでいないとかいうことが段々わかってくるんですね。

アメリカ文学っていうのは私にとっては暗黒大陸ですね。フィッツジェラルドとかヘミングウェイ、オー・ヘンリー、『トム・ソーヤの冒険』とかは読んだけど、あんまりどっちかっていうと、ヨーロッパの引力のほうが強かったので、いまだにアメリカ文学には通じていないですね。『風と共に去りぬ』とかその程度でして、だからそういう自分が弱いところ、自分があまり読んでいないところっていうのも、自覚できるようになるんですね。

私はこのところは中国によく行っているもんですから、この間も廬山、白居易と陶淵明と李白の詩をつくったあとに行きたいなと思って行ってきたもんだから、このところはマイブームは中国なんです。でもやっぱりそれにしても今よりもやっぱり心のひだがやわらかくて、何事も吸収力のあるころに、中国ブームだったことがあった。こんな厚い本のシリーズがあって、唐詩選とか金瓶梅とか、紅楼夢とか、よくもわからないのに読んじゃって、三国志も読みましたけど。そういうのを1回通過しておいたことっていうのがとっても今になると、二度手間のようですけれども、あ、何か手順がわかってというか、大体の見当がついているっていう点では、よかったなあと思います。

大学に入ったときは、そういうわけで、自分一人じゃわからない、自分で読んだんじゃわからないところに行こうと思ったんで、政治学に行った。文学とか音楽とか美術っていうものは、総合するものっていうか、何か声を発する、体で表現する、踊るとかっていう、自分の中から湧き上がるものを出していくようなもので、それと逆の運動ですよね。

社会科学は、社会の事象を、それを剔抉していく、切り分けて分析して、分析して、要素に還元するような仕事。これは私にはとても不得手な分野ですので、それは自分だけではなくて、先生なり、仲間の助けを得なくてはできないと思って、それで私は政治学に行きました。

ただ、そのときもあまり大学のカリキュラムもよくないし、これっていう先生もあんまりいらっしゃらないし。でも仲間がかなり優秀な人たちが多かったので、いろんな自主ゼミをつくって、勉強会をやりました。資本論の研究会もやっていましたし、ルカーチとか、スタロバンスキとかいろいろ勉強しようと思って、社会学のゼミなんかもありました。それから割とどこでも行くほうだったので、興味のある本を書いている先生がいらっしゃれば、よその大学も行って、法政大学とか、東京大学とかの先生の授業やゼミに潜りで、今「天ぷら」っていうらしいですけども、行って聞いていました。

だからそういうことがとても勉強になったんですね。私は早稲田っていう大学にいたんですけども、私はあそこの自分の学部では、「これ！」っていうのは、ついていたゼミの藤原保信先生っていう先生をとても尊敬していましたけれども。その藤原先生の学生は30人以上、大学で教えていますから、相当研究者を育てた方だと思います。姜尚中さんなんかもちょっと上の先輩なんですけども。

それよりよかったのは、すぐ隣に演劇博物館っていうのがあった。坪内逍遥が文学部長だったころからの伝統で、芝居をすごく奨励しているんですね。「ファウンテン座」っていうシェークスピアの劇場と同じ形に建てられた古い建物は今、登録文化財になっていて。昔はそこでシェークスピアを本当にやったらしいんだけど、私らのときはそういうのはなかった。

でも演劇博物館の講座っていうのが毎月ありまして、これは素晴らしかったんですね。毎月役者が来たり、演出家が来たり、歌舞伎の俳優さんが来たりして、いろんな芝居の話をしてくれたんで、これだけはサボらずに行きました。それが私は大学では一番よかったかなと思います。

私は乱読はすごく大事だと思うんですね。だから時間がもったいないと言って、よく子供に良書だけを選んで与えるっていうことをしますけれども、私はそれだと目が利かないと思います。やっぱり料理もそうで、まずいものを食べるから、うまいものがわかるんであって。だからつまらない本や心がこもっていない本や、粗製乱造な本や、そういうものも読んでこそ、ちゃんとした本や香り高い本を選ぶ力がついてくるんだと思いますので、私は乱読のすすめ派です。

それとは逆のことを言うようですけども、大学のときは『読書の泉』って皆さん覚えていらっしゃいませんか。これは大学生協連が出していたものなんですが、各分野別のスタンダードワークとは何なのかっていうことを書いた本でした。これを端から読んで、斜めに線を引いていった。私は大学生のときやっていたんですけども。例えば政治学だったら、丸山眞男さんの本は当時読まなきゃいけないし、升味準之輔さんの本とか、福田歓一先生の本とか、必ず読まなきゃいけない本というのがあるわけ。経済学ならサミュエルソンとかそういうもの、宇沢弘文さんの「自動車の社会的費用」とか、そういうのを読んでいたわけで、そういう各分野について、とりあえずこれは読みましょうというような本を、きちんと示してくれるガイドがあっ

たっていうのがよかったと思います。

うちの近くの東大の生協に行くと、東大の先生が新入生に進める本っていう冊子があって、これはすごくいいなあと思います。その中に私の書いた『鷗外の坂』を挙げてくださっていた教員の方がいらっしゃって、これは大学の周りのことを書いた本だから読んでおくようにって書いてあったんですけれども。社会人になってからのことはもうカットしてしまいますけど。1984年から私は地域誌をやってきました。小さな地域のことを勉強していくっていう中でも、ちゃんとやろうと思うと、やっぱり文芸史も美術史も仏教史も社会学も民俗学もいろいろやらなければいけない。だから私の一緒のスタッフは高校を出て出版社に勤めていた人で、かなり優秀な編集者だと思いますけど、彼女は「まゆちゃんと一緒に谷根千やったから、大学を4つ出た気分だわ」とか言っています。多分彼女はそのくらい勉強したと思いますね。

この27年間に私たちが住んでいるところには、例えば漱石も鷗外も露伴も一葉も島崎藤村も、そして仙台生まれの相馬黒光もみんないた。その人たちのことを一人一人の伝記を読み、全集を読んだりしながら、雑誌をつくってきた。それは本当に、内から知りたいという欲求に基づいた、そういう読書が彼女は多分この20数年してきたんだと思います。まさに私もそのような読書を20数年してきて、その中で雑誌に、薄い雑誌では表現できないことを、本の形にまとめているうちに、物書きというか、恥かきみたいなものになってしまったんですよね。

私は3年前に目の病気をして、失明する危機に至りまして、本当にショックでしたね。一番好きな本を読むことさえあれば、これから年を取っても一生楽しんでいける、私には退屈はないなんて思っていたのが、本を読むことができないという状態に至った。もうこれだけ読んだからもうしようがない、もうやめろっていうことなのかなあみたいにも思ったんですけども。

それと同時にこの病気は記憶力にかなり障害をもたらして、本当に人の名前は出てこないし、舌がもつれてしどろもどろになっちゃうんですね。それで一番困ることは、読んだものを片端から忘れるんです。それでものすごくそれもショックだったんですが、逆転して考えたんですね。これは何度読んでも面白いってことなんですね。自分の持っている少ない本でも、「あれ、これ家にあったな」と思うときもあるし、「え？これ読んだっけ？」と思うことがある。読むと、あ、ちょっと読んだ気がするわとか思いながら読む。また忘れる。また読むんですね。だからもう何度でも繰り返し読めるというのが、いいんじゃないかと思っています。

読書と関係ないんですけども、本当に毎日違った方向の電車に乗ってしまったり、駅を乗り過ごしてしまったり、カギを持って来るのを忘れたりっていうことが最近とみに多いんですね。最初はそのたびに落ち込んで、ショックを受けてがっかりしていたんですけれども。

最近はこういうことにしたんですよ。1日3つまでは失敗していいっていうことにした。そうすると、あ、まだ2つ目だと思って、それほど暗い気分にならないっていう。もし皆さんもそういう症状が出てきたら、ぜひお試しください。せっかく市長さんが忙しいのに、今日も来てくださって、後半が楽しみで来られた方がほとんどだと思いますので、ではこれで私のつたない話は終わりにします。どうもご静聴ありがとうございました（拍手）。

対　　談

「読書は未来をつくる」

～読書文化と読書の大切さ

作　　家　森　まゆみ氏

仙台市長　奥山　恵美子

司　　会　川元　茂氏

川元　皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました株式会社プレスアート Kappo・書籍編集長の川元茂と申します。本日はよろしくお願いいたします。森さんのお話、非常に楽しく拝聴いたしました。いろいろ面白いキーワードを今日は教えていただいたなと思っています。「セルフラーニング」という、自ら求めてじゃないと勉強は身につかないという部分ですとか、あと読書の地図を持つとか。私も読書を通じてしまってあった種が芽生えるという経験を何度かしたことがありまして、かつて読んだ本がどこかで実を結ぶという点に共感しました。

今日は仙台市民図書館移転開館 10 周年国民読書年記念フォーラムということで、「読書は未来をつくる」～読書文化と読書の大切さというテーマでお話しさせていただきたいと思います。主に読書体験、仙台の読書文化をめぐる動き、読書の未来などの話をおよそ 1 時間程度で、奥山市長と森先生にお話をしていただきます。それでは市長、今日はよろしくお願いいたします。

奥山　どうぞよろしくお願いいたします。先ほど森さんのお話を聞いていて、私が一番「あ、同じだ！」と思ったのは、最初の読書体験が雑誌『ミセス』や『スクリーン』だ、というところで、私の場合は『主婦の友』でした。

私は、昭和 26 年生まれですが、昭和 30 年代の頃は一般家庭では、まだまだ貸本屋さんを利用することが多く、必ずしも毎月雑誌を買える状況でなかったと思います。当時母は『主婦の友』を回覧雑誌で借りておりましたが、忙しいため夜までは見ないので、小学校 4 年ごろまで学校から帰るとこっそり『主婦の友』を読んでいました。森さんと同様、私も雑誌で育ったなあと思いました。

森　どこでお育ちになったのですか？

奥山　私は、生まれは秋田ですが、父の仕事の関係で幼稚園から引越しが多く、秋田のほか、北海道や金沢、福井などの小中学校にも通いました。高校は秋田で入学し、盛岡で卒業しました。大学で仙台へ来て、やっと「あぁ、これで私の転勤人生も終わった、もう二度と引越しのある仕事には就かないぞ」と思って地方公務員になりました。

森　だから適応力があるわけですね。

川元　市長は森さんのことを以前から存じあげていたと聞いたんですけども、そのあたりをぜひお聞かせください。

奥山　広報課の係長の時『グラフ仙台』で、森さんと私の共通の知人の結城登美雄さんと一緒にお仕事をさせていただいたことがあったのですが、そのときに結城さんから、「すごく若い人なんだけど、女性たちだけで東京の下

町で地域雑誌を作っている森さんという人がいる。自分の足元にあるものを大事にするっていいと思うんだよなあ。森さんはいいよなあ」というお話を伺ったことがありました。

森　嬉しいです。今そんなことを伺って。結城さんから面と向かって誉められたこと一度もないですから。

奥山　でも結城さんは森さんにはぞっこんだったと私は思っております。

森　ありがとうございます。そうですか。

奥山　結城さんのご推薦で、市の職員も、出張の帰りにお邪魔して、谷根千を何冊か入手してきた人がいたと思います。

森　それは五十嵐さんっていう人だ。

奥山　そうかもしれません。五十嵐さんは私の２年ぐらい先輩の、今はもうお辞めになった方です。谷根千は面白い、こんなのが仙台にあればいいよね。そんな会話をしていたのを思い出します。

川元　私も「せんだいタウン情報」という雑誌を出している会社ですので、地域情報を 30 年近くやっているんですが、「谷根千」とはまたちょっとスタンスが違うんですけども、同じ地域雑誌の仲間として共感しておりました。

　さて読書という部分でいいますと、結構ショッキングなデータがあるので、まずその話から言わせていただきます。

　男性ビジネスマンを対象にした調査なんですけども、本や新聞、雑誌を読む時間が１週間で２時間 36 分しかないという結果が出ました。1980 年には８時間 40 分もありました。男性ビジネスマンが対象で、20 代から 50 代の方 400 人に聞いたアンケートなんですけどもね。

　その一方で増えているのがネットやメールに費やす時間、それが週に約８時間あるということで、一番多いということなんですよ。今まではテレビが一番でしたが、今はネットとメールが一番になってしまっています。活字離れっていう言い方が正しいのかどうか、いろいろ解釈はあると思うんですけども。やっぱり活字に触れる機会が少なくなっている気がするんですが、実感としてはいかがなものでしょうか。

奥山　私は多分アンケートを回答された 400 人のビジネスマンとほとんど同じような生活ではないかと思います。市長になると、単行本を読む時間って確かに少ないですね。

　「市長になって何か困ることありますか？」と時々ご質問を受けるんですが、それは２つあります。一つはデパ地下で試食をするということがかなり

難しい（笑）。やってできなくはないですが、自己規制が働いてしまう。

もう一つは、文芸的な単行本、特に森さんがお書きになるような、評伝みたいなものをじっくり読むということがなかなかできないなあと。これは自分自身の心がけの問題もあるのかもしれませんが、市政の中で必要な資料を読むとか、いろいろな報告書を読むとか、どうしても実利的な本が多くなってしまい、文芸的な世界からちょっと遠ざかっています。ただ、それだけだと生活の本当の心の質みたいなところに辿り着かないのではないかと残念なところですね。

森　私は同じように東京にいると分刻みで仕事していますし、自分の締め切りもあるし、市民運動もやっていますし、雑誌も出さなきゃいけない時代もあったので、どうしても研究的に読むっていうか、自分の仕事に必要な資料という観点でしか読めないんですね。

だからそういう意味では、丸森にクラインガルテンをお借りしてからは、もうここにいるときは仕事はしないと。ずっと本を読んでいますね。そういうことで、ものすごく助かって、普通なら読まないものをつれづれなるままに、あ、ちょっと気になるからこれ読んでみようって。これ読んだら、今度ここに書いてあったこれが気になる、こっち読んでみようみたいな。それで朝までまた読んでしまうっていうような読書ができる環境が、今は丸森にあります。

確かに私もパソコンはライトユーザーで、あれに取り込まれたくないっていう抵抗をずっとしてきたんですけども。でもこの目の病気をしてから、字がうまく書けなくなって、元々悪筆で編集者泣かせだったんですが、ますますひどくなってきたので、もうパソコンに切り替えまして、それで編集者はみんな大喜びしています。打つ手間もなくなったわけですね。

検索には使いますし、確かに便利な面はありますね。ちょっとおぼろげに覚えていることだけで、調べたいことに突き当たることができたりもするのですが。そういう意味では非常に曖昧な情報ですよね。ウィキペディアとかああいうのでも。典拠性がない。あたりをつけるのには使えるけども、それに典拠することは、プロの作家ではできないんです。

ただ、何かおもちゃのように、あれでネットサーフィンしていると、何か仕事をしている気になっている人が、随分多いような気がします。やっぱり自分をどこかにスタンスをきちっとしておかないと、何かあれに取り込まれていくのではないかという懸念は持ちます。

逆に私たちの地域は今、歩く人も増えているし、谷根千を買ってくれる若い人も増えているんですね。バックナンバーが結構売れていっています。あれは手づくりの雑誌で、そういう点ではインターネットの対極にあるものですが、若い人がむしろ、もうインターネットに飽きたり、それでは得られないものを手触りとか、やっぱり雑誌のたたずまいとか匂いとか、そういうものを求めている人が随分増えている。そして古本なんかも、すごく古本特集が売れたり、古本屋に行く若い人たちが増えている。そういうことも何か

一方であるような気がしますけど。

川元　なるほど。昨年、森さんのインタビューで丸森クラインガルテンにお邪魔したんですが、本を読む環境としては非常に素晴らしいと思いました。森の中にあって、畑があって。

森　電話はないしね、パソコンはないし。訪問販売もないし、宅急便も来ませんから、おかげさまでまず何にも遮られないですね。

川元　あの環境でいろいろと本を読まれているんだなと感じました。それから市長の青春時代の読書のお話なんかもお聞かせいただけるとありがたいんですが。

奥山　転校が多かったので、友達関係が継続しづらいんですね。さすがに高校になると、文通したり、電話をかけたりとか、転校した後も友達の関係は続いて、今も仲良くしていますが、中学生までの間、日常的に会わない人と自分の気持ちを通わせ続けるのは難しかったのです。

私が割と本を読むようになったのは、転校が影響していたと思います。小学校２～３年の頃ですが、講談社に１冊200円くらいの子ども向けの本があって、孫悟空か何かを父親が買ってきてくれて、こういう面白い世界があるのかと。毎月のお小遣い200円をもらうと、父親に今度はそのシリーズの、バンビ物語を買ってきてとかお願いしていましたね。読んでしまうと、残りの１カ月は、次は何を買おうかなということだけを考えて過ごしているという感じでした。

うらやましかったのが、『少年少女文学全集』を買ってもらえる子がいて、そういう子となるべく仲良くなって借りられないかなと（笑）。ちょっと友情にも打算があったかもしれませんね。

森　同じことを私も『りぼん』っていう雑誌を買ってほしかったのに、うちはそういうのを買ってくれなかったんで、『りぼん』を買ってもらっているうちの子に「遊ぼう！」って言って、遊ばないで読んでいた。そのうち、あの子は『りぼん』を読むためだけにうちに来ているよって言われて、追い出されちゃったことがあります。

川元　りぼんは漫画ですよね。

森　そうです、はい、「ひとりぼっちのすずらんちゃん」とか、いろいろ面白いのがあった。「秘密のアッコちゃん」とかね。

川元　森さんは先ほど講演いただきましたように、中高校生のときにたくさんの文学に触れられていて、文学少女だったんだなと思いました。それが現

在の作家生活につながっていらっしゃるということですよね。

奥山　でもすごい量ですよね。

川元　そうですね。

奥山　森さんの、１年で１国制覇、すごいなと思いました。それと、１つのことからすごく関心という触手が伸びていく。その伸び方のスピードがとても速いと思いました。

　私は、小学校のころはあまりに転校していて、どこに図書館があるかわからなかったので、学級文庫を楽しく読みました。あとは盛岡一高のとき、帰り道に岩手県立図書館というのが城址の公園の中にあって、一生懸命読んだのは、山岡荘八の徳川家康全23巻。これに高校２年のときにはまり、２回通して全巻を読んだことがあります。

森　あれは面白いです。私もおじさんちにあったので、行くとそれを読んでいましたから、２回は読んでいないけど、１回は読みました。

奥山　２回も読んだので、徳川家康の最初の奥さんというのが築山御前で、離婚状態になってしまい最後には結構不幸な結婚生活だった、なんていう瑣末なところまで覚えていますね（笑）。

川元　なるほど。歴史小説を高校のときに読まれていたと。

奥山　そうですね、楽しかったです。

川元　おふたりはお子さんを育てられていて、先ほど森さんがやっぱり子供の部分においては、本を読める環境を与える、環境づくりの大切さをお話されていたんですが、実践されていた部分でいうと子供と読書との接点はどうですか。

森　さっき言っただけで本当はしていない（笑）。私は子供を育てていた頃は、赤貧を洗うがごとき状態だったんですね。今だから言えるのですが、本当に１杯のかけそば状態なんですよ。子供２人連れてラーメン食べたいって言い出して、しょうがないから入ってね、おじさんに「私はいいですから、すみません、２人で１杯でもいいですか？」って言って、そしたらね、そのおじさんが「いいよ」とか言って、運んできたラーメンに鳴門が120度に１個ずつ乗っかっていたんですね。

　３人で分けて食べなさいっていうことなんだなあと思って、涙が出るような生活していた。受験もさせたことないし、習い事もさせたことないし。ただ、私が下の子たちを迎えに行く保育園が団子坂という坂の途中に

あったんです。その坂の上には本郷図書館、鷗外記念本郷図書館があったんです。これは森鷗外の家の跡にできている由緒正しい図書館で、うちの娘は必ずお母さんは保育園の帰りに図書館に寄って家に帰るっていうコースがわかっていたので、必ずその図書館で待ち伏せしていたんですね。

それで娘は図書館の児童書の本を全部読んじゃったんです。だから私が仕向けたわけではないんですけども結果として本を読む子になりました。けれども私と読む傾向が違う子で、理科系の本が好きで、そういう何かものをつくったりすることが好きでした。家の中にあったはずの塩が丸々一袋なくなっていておかしいと思ったら、塩を使って何かアイスをつくったとかね、たんぱく質のグルテンつくるのに小麦粉１つ使っちゃったとかね、そんなことばかりして実験していたんですけども。でもやっぱり図書館がそこにあったことが、たくまずして大きなことだったと思います。

川元　市長はいかがでしょうか。

奥山　私の夫は大学の教員なのですが、自宅には夫の経済学関係の本があって、また私が乱読好きなので乱読用の本とかがある。

子供が中学校ぐらいのとき、ポツっと言ったのは、「本ってあんまりあるとうっとうしいよなあ」って。聞こえたときには一瞬ギクっとしましたね。もっと小さいときには、朝、私が新聞を読んでいたりすると、わざわざ新聞の前に回ってきて、バリバリバリって上から手をやって、新聞を破ろうとしました。

それは多分、自分たちより明らかに活字のほうを大事にして、自分たちは「うるさい！」と言われかねない。活字は母親の愛情を奪う敵だ、みたいなものが、あるいはあったかもしれない。子供には一応読み聞かせとかはしたんですけど、読み聞かせしながら、自分も本を読みたいとどこかで思っていたので、見透かされていたのかもしれません。

子供たちは、あさのあつこさんの『バッテリー』とか、『一瞬の風になれ』とか好きですね。親がよかれと思ってあげるものはあまり好まれずに、みたいな感じはします。

子供の読書に関しては、あんまり強制して与えるものでないなと思います。

川元　そうですね。うちも息子がおりまして、今、小学生なんで、そろそろ読書をちゃんとしてほしいなっていうふうに思っているんですけども。最近やっと図書館で、小学生でもカードをつくれることを知りまして、それで自分のカードをつくっていました。自分のカードがあるとそれが喜びになって、図書館から本をせっせと借りています。

奥山　お１人でいらっしゃれない場合にはどうぞご一緒に連れていらしてください。

川元　はい、わかりました。それではちょっと話を変えまして、仙台の読書文化についていろいろお話をさせていただきます。市長はせんだいメディアテーク初代館長として、10年前に館の設立に大きく携われられたんですけども、仙台の読書文化、出版文化はこの10年のスパンで見たときに、大きな変化があったのではないかと私は思うんですが、市長いかがでしょうか。

奥山　仙台市民は、本好きな方が多いという感じがします。仙台の街の特色として、城下町だったという気風、この街のどこかにそういうものがあって、例えば本に親しむとか、本を書く方を非常に尊敬するとか、そうした雰囲気が街に広く流れているような気がします。

今、若い方にお聞きすると、インターネットは便利なので、例えば本を買うのに何も不自由しないから、図書館とか大きな本屋さんもなくてもいいとおっしゃいます。インターネットで本を買っていらっしゃる方は、おわかりだと思いますが、３年前に出た本をその時に買わなかったら、今買おうと思って検索しても、もうこれは扱っていませんということは結構あるわけで、ちょっと前の本、そのもっと前の本、読み落としてしまった本を読もうとすると、図書館でしか今入手できないことは結構あります。流通があまりにも早すぎるというのも、大きな問題だとは思うんです。

そういう意味で図書館の蓄積があるところのよさを、図書館がもう少し、発信していかなきゃいけない、そんなふうに思っております。森さんのように、本をいろいろ調べられる方にとって、すぐ消えていってしまう本の流通っていうのは大変なことじゃないですか。

森　そうですね。ですから今、月刊誌が３日～４日しか書店の棚にないとか、週刊誌は１日もないっていわれますけど。ほとんど本も、生鮮食料品並みなんですね。その出回ったチャンスに買わないと、また取次に戻され

てきちゃう。委託商品ですから、買い切り制ではないから、あまり売る気もないという本屋さんもあって、それとは反対に、一生懸命本を売ってくださっている本屋さんも多いわけなんですが。

そういう点では今度の私の『原田病日記』も、大体100万人に5人しかかからない病気のことを書いた本を出そうなんていうのは、大それた話なんです。たった3,500部しか刷っていません。これが「たった」なのか、「3,500部も」っていうのか、というのがわからないんですが。私も原田病という病気があることや、ベーチェット病とか、膠原病とか自己免疫疾患で苦しんでいらっしゃる方とも同じ苦しみでもあるので、ぜひそれで手をつないで、病像を明らかにするのが、物書きの仕事だと。そう思って書いたわけです。

おかげさまで、全国の図書館でそれぞれに買ってくださったんですよ。聞いたら、こちらでも何か今、予約待ちがついているということで、ありがたいことです。そういうわけで、図書館がきちっと本を買って下さったら、私たちみたいな弱小というか、地味な作家は、それで十分とはいいませんが、かなりの部分助けられるわけです。ベストセラーを複本でいっぱい入れるのもいいかもしれませんが、それは時とともに残るものもあり、残らないものもある。でも必要な本が必ず図書館にあれば、そこを頼りに調べたり、自分の知を開いていくことができますから、いい本を処分しないで下さいということをいつもお願いしているんですけども。

川元　私は出版する側なものですから、どうしてもビジネスを抜きには話せません。初版の部数にしても、当然マーケットのサイズを計算してやりますし、売れなければ絶版せざるをえません。図書館はそういった意味で１回出したものをストックしていただける場所として非常に貴重だなというふうに思っています。

さきほど市長から仙台の人たちは活字や文学に対して、非常に敬意をお持ちだというようなお話をいただいたんですが、15年ほど前の河北新報の記事、ちょっと今手元にはないんですが、荒蝦夷という仙台の出版社の土方さんとお話をしていて、「仙台は文学不毛の地と言われていた」という記事が話題になりました。５～６回の連載だったと思うんですね。

その記事によると文学者や作家の先生は仙台にはいらっしゃらなくて、盛岡には高橋克彦さんをはじめ、多くの方が活動されていると。文士の街は盛岡だと言われていました。今15年経って、逆に仙台にたくさんの文学者の方が住まわれていると思うんですが、市長はいかがですか。

奥山　高校時代は盛岡に住んでいたのですが、やはり盛岡にいると啄木と宮沢賢治、日本を代表するこの２人の大文学者の故郷であるということ、またその風土性みたいなものがあって、盛岡は文学性の濃い街というイメージがありました。一方で、仙台はそれほどでもない、ということがあった。

ただ、最近仙台は文学というものに、非常にそりが合ってきている部分があって、それは多分文学者と住んでいる場所との関係性、かつての啄木にとっての盛岡とか、賢治にとっての花巻というような時代から、時の流れとともに変わってきているのではないかと思います。仙台の例えば伊坂幸太郎さんがお書きになるような作品と、この街の親和性のよさみたいなものが1つあるのかなと感じます。

もう1つ、仙台文学館という、文学を中心として発信しようとする施設ができて、そこに井上ひさし先生のような、大変求心力のある館長もおいでになって、文学について掘り起こしたり、文学講座があったりといったことが盛んになってきた。森さんにも昨日は文学館で、講師としてお話しいただきました。

そういったことは、10年という歳月を経て、街の中にじわじわと浸透していって、眠っていたものを掘り起こしてきている。何か香水のようなふわふわっとした、微粒子が街に溶け出すような感じっていうのが、今起こってきているのかなと思います。今お話しされた荒蝦夷さんの出版活動も、そういう意味で街の文学の土壌を掘り起こしていこうという活動のように私には思えますがいかがでしょうか。

川元　ええ、全く同じ感想を持ちますね。土方さんとよく話をするのは、出版の側からもっともっと仙台の街を盛り上げていくべきだ、書き手を掘り起こしていくべきだということです。読書文化を創造していかなきゃねっていう話を何度もしていまして、やっと今年ぐらいからそういう環境ができるようになってきました。

仙台は狭い街なので、同業とはいえライバルでもあるので、なかなか連帯しづらかった部分はあったんですが、最近は大同小異で団結していこうという機運になっています。森さんにもお世話になるかもしれませんので、よろしくお願いします。

奥山　森さんのお仕事で、とても興味深く思うのは、そのままでは市井の人として消えてしまうかもしれない人に光をあてるというところですね。

文字の力に対する素晴らしい確信というか、語られないものはやはりなくなったことと同じことになるので大切になさる視点が大切だと思います。

木次乳業の佐藤さんについてのご本が、私はとても好きです。

森　佐藤忠吉さんですね。

奥山　市井の人の持つ非凡さみたいなものを大事にしたい。そういうものを発掘したり、発信したりすることで、日本社会全体でも、それらを大切にするという気持ちへ、このあまりにも物質的な世の中から、ちょっと変わってくる。そこに荒蝦夷さんの仕事もつながっているのかな、という気もするんですけれどね。

川元　同感です。森さんは仙台学に寄稿されたりしていますよね。

森　あ、そうですね。赤坂憲雄さんとも、朝日の書評員のとき一緒だったりなんかして、おつきあいがあったこともあって、この間はちょっと書かせていただきました。私もこれは長い話になってしまうのですが、ちょっと前に『彰義隊遺聞』という本を書きまして、これは上野の彰義隊のことなんですが、皆さんご存じですか。戊辰戦争っていうのは慶応 4 年（明治元年）の鳥羽伏見の戦いから始まって、翌年明治 2 年の 5 月 18 日かな、函館戦争までを戊辰戦争というんですけど。その中でやっぱり上野戦争っていう、5 月 15 日の戦いっていうのは、やはり戊辰の命脈を決める大きな戦いだったと思うんです。

それがたまたま、自分の地域が戦場だったことを知って、やっぱりこれを、もう既にそのとき戦った人には聞けないわけだけど、地域に残っている資料なり、痕跡をまとめておかなければいけないと思って、谷根千でやった手法を基にして、彰義隊遺聞という本を書きました。そのとき私は、母方は江戸の素寺町人の末裔だからどうしても彰義隊に思い入れがあった。これは大宅賞の最終候補にもなって、取れなかったですけど。北東文芸賞っていうのを、何か東北の寃をすすいだり、東北を舞台にしたりして書いたものに下さる賞っていうことらしいんですけれども。今年は沖方丁さんの「天地明察」が取られましたよね。それをいただいて何か本当にびっくりした。東北にゆかりの賞だとうれしかった。

そのときにやっぱりこっちに来てから、もっと感じたことは、自分はやっぱり父方が丸森で、母方が庄内なんです。そうか、私は東北列藩同盟の血なんだなって、やっと気がつきまして。何かやっぱり、東京にいても仙台とか伊達とかって言葉がくると、ピン！って反応しちゃうんですよ。そうすると今まで気にもしていなかったけど、もしかしてあの人は伊達藩の者ではなかろうかとかね。

例えば鮎貝さんって、今ね、ラジオに出てくる音楽評論家がいるんだけど、あれ、もしかすると仙台藩家老の鮎貝家の者ではないだろうかとかね、違うかもしれないんですけども、すぐ考えちゃうんですね。

奥山　私がお仕えした課長さんで、鮎貝さんという方がいらっしゃるんですが、まさにお話の鮎貝家のご当主です。

森　そうですか、珍しいお名前だからね、そうなんですよね。

森　私は丸森の農家の出身だって父からも聞いたし、たしかにそうなんですけども。そうしたらね、丸森に行ったら、七代前の森家の当主が書いたっていう文書が出てきたんですよ。これがまたものすごく達筆なんですよ。七代前なんていったら、字なんて書けたかななんてぐらいに思っていたら、やっぱり伊達藩の支藩の家老か何かをやっていたらしい。と言っても、たった 13、たったなんて言っちゃいけないけど、13 石なんですね。

１貫三百文とかでいう、後藤新平の家は水沢で、あそこまで伊達藩の北限で、うちは南限のコサック兵みたいなものでしょうか。北限の留守氏の藩の後藤家は 10 石らしい。それで戊辰戦争に行ったこともわかったし、天明の飢饉のときにうちの祖先はどうしたかとか。いろいろわかってきました。戊辰のときには、伊達藩が 62 万石を 28 万石にされて、うちの丸森のあたりは結局、南部が入ってくるという話だったんですよ。

だからそれで「どけ！」っていわれちゃったんで、身分のほうを捨てて土着して、民になった。もちろん 260 年も農業しながらヤットラの武道もやっていたらしいんですよね。そういうことがわかってきたら、もう面白くなっちゃった。丸森に来たおかげで、自分の家のことがものすごくわかってきたっていうことです。

うちの祖父はものすごく礼儀の正しい、私と違って、膝も崩さないような人で、お能を、喜多流をやっていたそうです。ところが丸森の集落の、小斎というところに行きましたときに、ここでは小笠原流の礼法をみんながやっていて、そして喜多流のお能の先生がいると聞きました。

ですからやっぱりその土地の記憶っていうのは、そういうふうに残っているんだなあって思いまして、260 年、平和であっても辺境っていったら変だけども、相馬との国境で、自分を律して、いざというときには戦わなきゃいけない立場を崩さないままに、農業をやるっていうことの支える規範も必要だったろうし、遊芸も必要だったろうし、いろんなことが必要だったんだなっていうことがわかってきた。それで私は今自分の家のことを、戊辰とからめて、もう 1 回丸森を舞台に書いてみたいと思っています。

川元　それはぜひ。

森　ですから、今年はテレビで龍馬伝やっていますけれども、要するに西国雄藩が明治維新を起こし、それが官軍史観みたいな形でその後ずっと歴史に影を落としてきたと思います。多分、仙台藩にも龍馬ぐらいの人もいたのではないかと思うんですよ。林子平しかりね。玉虫左太夫とか、さっき博物館で見てきたのですが、ああいう立派な人たちのことが、やっぱり負けた側であるからこそ、あまりきちっと記録されておらず、何か浮き立っていないというところがあると思います。私が急に来て、そんなこと言うのも変なんですけど。

川元　先ほども出た荒蝦夷は戊辰の時代の仙台藩の活躍や功績を掘り起こしていますね。そういうことが非常に大切なことだなと思います。

奥山　最近、玉虫左太夫はちょっとした仙台のマイブームになっていまして、そちらにいらっしゃる出雲幸五郎さんが、荒町で、左太夫に関する落

語やイベントなどをなさったりしています。また最近本も出ていますね。

森　私は星亮一さんって方、遠い、遠い親戚らしいです。あの方も「東北列藩同盟」という本を書かれてまして。あの本をよんで、あぁ、玉虫左太夫とかすごいなあって、梶原平馬とかね、いろんな人が出てくるじゃないですか。私、酒井玄蕃という庄内藩の家老も大好きなんですけど。そういういい男が戊辰の東北にもいっぱいいたなぁっていう、知らなきゃ損だなみたいな人がいっぱいいたように思います。

川元　わかりました。仙台に住まう作家の方々が増えてきて、文学のある街として認知されてきているというお話をしましたけども、実は、昨年から「Book ！ Book ！ Sendai」という市民レベルでの読書啓蒙活動も仙台で始まっています。昨年インタビューさせていただいたときに、１箱古本市と森さんとの関わりについて教えていただいたと記憶しているのですが。

森　あの活動は特に私が中心でやっているというわけではないんですけども。谷根千という地域は、非常に人気のある地域になりました。行政は一銭も使っていないんじゃないかと思うのですが。私たちが雑誌で掘り起こして、それが伝播して、それをもって街を歩く方が増えて、そして小さなお店ができたり、あるいは古い建物を改造して、カフェになったり、ショップになったりしています。若い人が今東京で一番住みたい街の１位は吉祥寺らしいんですが、２位は谷根千なんですね。

川元　へえ、そうなんですか。

森　でも、だからといってそれで地価を吊り上げるのではなくて、若い人でやる気のある人に安く場所を貸してくれるような大家さんもいるんです。できるだけ経済が表に立たない街づくりというのを東京でしてみたいなという考えです。結局、交流と応援を基本としているものです。その中で、芸工展という街中を使った美術展を秋に１カ月やっていまして、これもすごく面白い。縁側とかブロック塀を使って写真展をやったり、絵画展をやったり、オブジェをつくったり、それから詩もあるし、踊りもあるし、新内（※）もあれば、何でもあるようなことをやっています。
（※　江戸時代にできた邦楽の一種）

私たちの地域には、漱石、鷗外、一葉もいたし、近くに美術館や何かもあるところなので、編集者とかカメラマンとか作家とか、そういう人も結構住んでいるんですね。その中で本の好きな人たちが何か面白いことを考えようっていうんで、「南陀楼綾繁（なんだろうあやしげ）」っていう名前の怪しげな（？）名前のライター、本名は河上進君という人が中心になって、みんなで１年目やったんですね。

それは単純に古本を１箱の段ボールに詰めて、みんなで売ろうということなんです。店番をしながら、本の好きな人同士で本の話をしようっていう、それだけのことなんですが、これが何か今、全国に飛び火しているみたいです。福岡でも札幌でも始まりました。仙台はやりたいという方が、私の話を聞いていた中にいらっしゃったので、ご紹介したら、何か仙台でも始まったそうですね。成功しましたか。

川元　ええ、今年で２年目、私は２年ともいわゆる売主として出店しているんですけどね。

森　ああ、そうですか。どこでやっているんでしたっけ。

川元　それは２か所あって、サンモールという商店街と、定禅寺通でやっているパターンもあって、いわゆる草の根的な活動が仙台の街の中でも動き出しているなと感じました。

森　あと聞き書きをしていらっしゃるグループも、仙台草紙でしたでしょうか、やっていらっしゃる方たちがいますよね。そういうのもすごく大事な活動だと思いますし、やっぱり地域の資料っていうのは、どうしても散逸しがちなので、もちろん政宗とか支倉常長とかですと、博物館で十分に保存されていたりするんですけども。やっぱり地域に普通に生きていた人たちの記録とか日記とか、商店街のちらし、町内会の名簿、そういうものもぜひ図書館などできちっと持っておられたらいい。

奥山　青葉区で「平成風土記づくり」という作業が進められています。通町、小松島、国見地区で地域の歴史等の聞き書きとか、地域の自社の言い伝え等を集めて冊子にしようということがとても熱心に取り組まれています。谷根千のように地域を掘り起こし、足元を知る。足元を知ることがむしろ一番面白いことじゃないかという考えです。仙台の中でもそうした動きが、随分出てきたように思います。

森　結城登美雄さんが取り組まれています。目が利くというのか、私たちが谷根千を始めて２～３号目ぐらいのときに、もう本当ボロボロの私たちの茅屋の編集室に訪ねて来られまして、それから交流が始まって、私も逆に結城さんが聞き書きしたり、何か調査に行くのについて、仙台の登り窯が危機に瀕しているというのを見に行ったりしたのですが、何かあれは今ちゃんと残っているらしいんですね。よかった。そのほかにも、いろんなところに連れていってもらって、お互いのつくった冊子も交換したりしていたので、ああいうのがちゃんといつも読めるところがあるといいなあと思います。

川元　仙台市図書館振興計画の中間案がこちらにございます。その地域の読書文化を育むと同時に、地域の資料を保存していく動きがこの中間案に書いてあります。今お話しいただいたような、やっぱり本を保存することの大切さがありますね。

奥山　最近自治体も非常に財政環境が厳しくなって、図書館の資料購入費が全国的に見ると、かなり削られています。

本は出てきたときにいいものをつかまえておかないと、何年か経ってから買うというのは、これは大変なことなので、資料費を削るということは、その時代のものが抜けてしまうということなんですね。

図書館資料が、いかに大事かって言うことは、我々行政を預かっている者も十分自覚しなくてはいけないですが、市民の皆様の中からも、やっぱり図書館はみんなのため、そして後の世代のためだっていうようなことを、よくわかっていただいて、図書館応援団みたいな形でやっていただけるといいですね。

森　谷根千っていう雑誌は、文京区内の図書館などは複本で買ってくださっていました。私たち自身としては、この雑誌をどこかに置いておかなきゃいけないということで、然るべきおつきあいのある先生方のところにも送っていました。これは財政的には非常に苦しいことです。雑誌をさしあげるのは簡単なのですが、宛名を書いてその郵送料が、三種が取れないのでかかるわけなんです。また国会図書館と都立中央図書館には必ず送っておりました。

谷根千を終刊としてから、アメリカの大学からたくさん注文が、バックナンバーでありまして、ハーバードからは２ケ所から来ましたね。それで結局最後は１ケ所でなくてはいけないという大学の決まりがあって、ライシャワー研究所に入りました。あとエール大学、シカゴ大学、ミシガン大学、ほかにもたくさん、サンフランシスコの大学からも来たので、私、大変驚きました。アメリカの大学というのは司書がものすごく権限を持っているそうですね。それで同じ司書でもいろいろなランクがあって、カタロガーといって、カタログ見て注文できる人とか、自分の裁量で何か取れる人とかいろいろあって、博士号を持っているような司書がいっぱいいるんですね。

その人たちはエイジアンスタディーズというか、日本のこと、日本を勉強するにはこの雑誌は必要だというふうに判断したのだと思います。わざわざ買いに来た人もいました。これは必要だというものを判断して、必ず保存しなければならないという気持ちをやっぱり各司書の方たちに、誇りを持ってしていただきたい。最近では、オックスフォードに全巻入ります。谷根千をやってよかったなあというふうにしみじみ思っています。

川元　すごいですね。本当にすごいことですよね（拍手）。

森　他に載っていることは載せていない。全部オリジナルの調査と聞き書き

です。普通の人の生き死にを記録することによって、これが未来の人たちの地域の人間が読んで、役に立つようにと願ってつくってきました。後世の人に使えてもらえるって嬉しい。是非、使ってもらいたいと思います。たくさんの読者を期待はしないけど、必要な人が 50 年後に私たちが調べたことを伝えてほしい。今、既に私が調べたことを利用して、小説を書いている人はいるんですけども。使ってもらえたらいいなあと思いますね。

川元　なるほど。そろそろ予定の時間になってきたんですが、読書の未来という部分でいうと、今非常に読書の時間が少ないとか、あるいは予算が限られているとか、いろいろな問題が出てきています。でも少なくともこの３人は非常に本を愛しています。物体としての本を。

森　匂いとか、装丁とか、そういうのも好きですね。やっぱりすごく完成された形だと思いますので。もちろん今、電子書籍もめくれたり、そういう感じがとても出せるようになってはいますけれども、やっぱり私、電子は、それに目に絶対よくないと思いますよ、とか言って。きっと電磁波とか出るんじゃないかな。こういう非科学的なこと言っちゃいけないかもしれませんが。

川元　電磁波はわからないですけど、目は多分悪くなります。やっぱりモニターですから。

森　なりますよね、そうですよね。

川元　アマゾンから出ている Kindle という端末は目に優しい電子ペーパーを使っているので、まだ読みやすいんですけど。iPad はパソコンと同じですから、長時間の読書はあまり目によくないと思いますね。

奥山　本の重さとか、紙質がないのは、私としては残念ですね。行政的な報告書や、事実を確認するための資料ということであれば、Kindle 化されて、例えば経済白書を何年分検索とかということだったら、多分そっちを使うかなという気はします。

　楽しみのために読む本ってありますよね。少なくとも楽しみとして読む本であれば、やっぱり本そのものじゃないといやだなぁ、という感じはします。

森　使い分けるしかないんじゃないですかね。

川元　そうですよね。ニュースで国会図書館が電子書籍をこれから収集していくという話があったので、物体としての本と、電子としての本と、両方所蔵していくケースが増えていくのかなという気もするんですけれども。

奥山　ちょっと心配なのは電子媒体というのは、ハードウェアが次々に進化するわけですね。仙台市科学館で一番困っているのは、昔録音されたテープがありますが、テープレコーダーがなくなると、その時代に録音されたテープが再生不能になります。

今のいろんな電子データも、いつまで今のOSが使えるかということを考えると、そのたびに全部変換していくのかというと、それも何か非常に大変なことのように思います。そういう意味では本というのはそれ自体で完結しているすごいメディアですね。

川元　そうですね。

森　何ページの上のほうに書いてあったとか覚えているじゃないですか。そういうのが電子メディアではできないんですよね。それからやっぱり、谷根千の初期のころって、新聞なんかは相当マイクロフィルムを読んだんですね。あれは今、インターネットで電子化されているのはうんと楽だと思うけど、あれだってね、毎日半日もあれでずっと回して見ていると、下から光がくるんですよね。

病気をした私の老婆心ですけれど、マイクロフィルムで失明した学者って結構いらっしゃるらしいですね。だからやっぱりあれは光が入ってくるもので、目にはよくないと思う。相当インターネットで、パソコンで本を読んだり、あおぞら文庫なんかで私も読むことがありますけど、やっぱり疲れ方が本と違うなあって感じがします。否定的に言っているわけじゃないんだけどね。使い分けをするということで。

川元　うちの雑誌も電子版を今用意していて、12月から電子書籍化していくんです。時代の流れなので、そういった対応もしていかなきゃならない。

奥山　目の不自由な方にとっては、パソコンで読み取れるようになったことによって、初めて音声変換して聞けるようになったという、新しいメディアの、今までできなかったことを可能にするという役割もありましたので、全部否定するわけではないのですが。

川元　あとは文字を大きくできるという利点もあります。

奥山　はい、そうですね。

川元　わかりました。最後にご自身にとって読書とは人生においてどのようなものですか？　市長からお願いします。

奥山　世の中にはこんなこともあるのかっていうことを教えてくれるものですね。こんな人生であったり、こんな世界であったり、こんな料理のやり方

であったり。え？こんな人がいたの？とか、やっぱり自分の世界を何十倍にも広げて、全く知らなかったものにも到達させてくれるような、そんな存在じゃないかなと思います。

川元　はい、ありがとうございます。では森さん、お願いします。

森　私も同じようなことを考えます。世界に通じる道ではないかと思います。私はアイルランドに５月に安野光雅画伯とご一緒に行ったのですが、その時安野さんが『アンジェラの灰』という本を読んでいて、その現場に行ってすごく興奮していたので、帰って来てから読んだんです。いい本ですよ。これは新潮社クレストブックスですけれども。

本当にそのアイルランドの移民の子たちの、実に大変な人生を描いた本で、やっぱりこんな大変な人生があるんだって、読む前と読んだあとでは世界が違って見えてくる。それと比べたらと言ったら変ですが、私なんかまだまだやらなきゃいけないことがあるなぁって思ったりしました。そういうことで、励まされるというかな、読書をして励まされたり、またやる気が出たりということが多いですね。

私は書くことに行き詰まると、最も尊敬していたし、大好きだったってあんまり言いたくないんですが、須賀敦子さんという友達がいて、彼女の本を読むととても慰められるし、いろいろなことを思い出して、本当に原稿に詰まると、必ず須賀さんの本に戻るみたいなところがあります。そういう存在としても座右の本というのがいくつか、子規の句集とか、漢詩の本とか、いつも疲れるとそれを読むとか、へこむとそれを読むというような本があって、そういう慰めてくれ、励ましてくれる存在が本だなあっていうふうに思いますね。

川元　ありがとうございました。最後にお２人の本当にいい話をいただきまして、ありがとうございました。それでは質問を受けさせていただきます。

司会　川元編集長、司会進行ありがとうございました。そして森さん、奥山市長、とても貴重な時間をともに過ごせたことを幸せに存じます。ありがとうございました（拍手）。それではせっかくの機会ですので、皆さんのほうからご質問ございましたら、ちょっと挙手でお願いします。

フロアから（女性）　今、森さんが言われましたアンジェラのハイのハイってはどういうふうに書くんでしょうか。

森　ハイは ashes ですから、暖炉の炭の灰です。

フロアから（女性）　それは誰の作ですか。

森　フランク・マコートっていう人だと思います。

フロアから（女性）　フランク・マコート、いや、読んでみたいと思いまして。

森　はい、ぜひ読んでください。いい本ですから。

フロアから（女性）　はい、ありがとうございます。

フロア（男性）　図書館 10 周年おめでとうございます。昔のことになるんですけども。以前、西公園に市民図書館がありました頃に、野本さんというカリスマの図書館の司書の方がいたんです。わりと若くして亡くなってしまったんですけども。ひょっとしたら森さんも知っているかもしれませんね。結城さんとの流れでね。私も谷根千に行ったことあるんです。そのとき森さんいなかったんですけども。

森　すみません。

川元　あ、そうですか。

フロア（男性）　今の図書館でカリスマの方を館長さん、養成してもらえないかなというふうに思います（拍手）。何か人事異動で代わっていくような司書では困るんではないかと私は思います。一応要望しています。終わり。

森　何かみな、今日は図書館ファンの方がたくさん見えているみたいで。

奥山　野本さんという方は仙台市の図書館の職員で定年前にお辞めになって、子供のための本屋さん、落合恵子さんのような感じなんですけど、ポランというお店を立ち上げられて、ずっと仙台の中で児童文学をリードしてこられた方ですね。

司会　それではもうお一方ぐらいいかがでしょうか。ご質問ある方いらっしゃいませんか。はい、それではこれでおしまいということでよろしいですか。それでは改めまして森さん、川元編集長、奥山市長に拍手で感謝の意をお願いします。はい、ありがとうございました。これを持ちまして、本日のフォーラムを閉会させていただきます。ご参加ありがとうございました。―了―

国民読書年記念フォーラム
基調講演
世界に通ずる道
森 まゆみ
利用案内
監視カメラ作動中

仙台市民図書館移転開館１０周年
国民読書年記念フォーラム

制作・発行　仙台市民図書館
〒980-0821
宮城県仙台市青葉区春日町 2-1
発行日　2011 年 10 月